No.122
公民館だより
平成16年11月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

災害は忘れたころに

由良地区公民館長　飯澤登志朗

また台風、こんな会話を何回交わしたでしょうか。

上陸した台風十回以上、記録的な台風襲来の年となりそのたびに各地に大きな被害が発生し、また人命が奪われました。

特に台風23号では宮津市においても死者や行方不明、家屋倒壊等非常に大きな被害を受けました。

地球温暖化が原因の一つといわれていますが一九九七年に京都で採択された議定書は、二酸化炭素など温室効果ガスの排出量を各国がどれだけ削減するか国ごとに定めるものですが、各国のさまざまな思惑があり足並みが揃っていません。

日本の現状は非常に厳しく、二〇〇二年度の温室効果ガスの排出量は削減どころか九〇年度に比べて七・六％増加しているといわれています。

気温30度を越す真夏日が九十日を記録し、十月に入っても30度の日がありました。

過去、由良川の氾濫も再々あり治水工事や気象条件にもよりますが、近年多少減ってはいますが決して安全とは云えません。

明治40年の水害記録によりますと「後盆十五日より雨が降り続き十七日朝、脇地区の馬場谷岩穴ヶ谷一度に洪水、民家本宅及び座敷建物悉皆流失死者なし同十一時頃脇地区の山、小谷に至るまで洪水発生し住民のほとんどが東墓地へ避難した。

また大川（現在の由良川）の水増し湊村の家屋三～四戸流失、川上から三百戸程水戸を流れて出た」。と記されています。

昭和28年の台風13号では港地区のなか程まで伝馬舟で入れたことや、脇地区の宮川が決壊し附近の田畑に土砂が流れ込む等忘れることの出来ない洪水が発生しています。

今回の23号台風はそれらに次ぐ大きな台風でした。

新潟や福井、三重県等また再三の被害が発生した四国各県の被災地でも、再興に向けての取組みがされています。

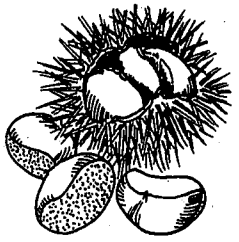
京都府の河川改修計画も流域住民の理解を得るまでに至っていないようで根本的な対策にはほど遠い状況です。

由良地区では過去何回か由良川水系河川整理について説明会が開催されましたが、その結果どうするのかについて伝わってきません。

京都府では、由良川の河川整備にあたり「安全な川づくり」「うるおいのある川づくり」と治水・利水・環境そして地域整備の支援を目標に住民との連携を図るとしています。

一日も早く対策が講じられ安心して暮らせるよう願っています。

また自分で出来ること、例えば冷暖房の適正化や資源の利活用等小さなことですが、このことが地球温暖化防止の原点ではないかと思われてなりません。



行事報告

主事　枝川隆亮

◎六月六日(日)
第十六回宮津市地区対抗駅伝競走大会

KTR丹後由良駅スタート市民体育館ゴールの南部コースで11チームが参加して開催されました。

昨年の成績を一つでも上げたいと自治連、公民館が一体となり例年と同様の取り組みで約一ヶ月間、毎日練習を重ねましたが成績は六位でした。

来年こそ、由良の底力を見せ以前達成した優勝を実現したいと思います。

由良地区の皆様がたのご協力、ご声援を宜しくお願いいたします。

◎六月十三日(日)
四部対抗バレーボール大会

春の恒例行事、四部対抗バレーボール大会を実施しました。

各地区とも中・高校生の参加があり、後衛からのスパイクなど高度な技術が見られ、白熱の試合が展開されました。

結果は以下のとおりです。

○男子の部　○女子の部

優　勝　四部　三部
準優勝　三部　一部
三　位　二部　四部
四　位　一部　二部

◎八月十四日(土)
四部対抗球技大会

お盆の行事、四部対抗球技大会を実施しました。

昨年は、雨天によるグランドコンディション不良のため実施できず二年ぶりの開催になりました。

一昨年までは青年の野球、壮年のソフトボールを実施してきましたが、野球人口の減少により暫定的にソフトボールに切り替えました。

野球の復活が望まれます。

試合内容は、青年らが若さあふれるキビキビしたプレーをするのに対し、壮年たちは熟達した動作で対応するも打数の早さに対応できず転んだり、エラーの連続に場内を沸かせました。

今年は、Uターンした由良出身者の活躍が多く見られ、勝利の喜びと、悔しさを味わった夏が終わりました。

前回同様、四部がA・Bチームとも優勝で幕を閉じました。

○Aチーム　○Bチーム

優　勝　四部　四部
準優勝　三部　三部

◎九月四日(土)
子どものびのび体験活動「染色体験」の実施

完全学校週五日制の実施や新学習指導要領の全面実施により、体験的な学習活動を行うことが重視される中で、児童生徒に本物の京の伝統工芸品にふれる機会を提供することにより、職業に対する理解、文化や伝統を尊重する心や態度の育成を図ることの目的により三年前から実施しています。

今年は「染色体験」実習で丹後織物工業組合大宮工場を訪ねました。

当日は工場が休日のため見学はできませんでした。

約30分間繊維の種類、蚕の一生・ちりめんの染色種類・方法を勉強し、その後染色実習に入りました。

ステンシル型染、マーブリング染の二種類を実習し、ちりめんも染色も初めての体験でありいろんな繭・生糸・反物を目にし手に触れることができ、丹後の地場産業であり世界に誇れる「ちりめん」が少し理解できたものと思っています。

太古の森に想いを寄せて

由良小学校長　倉野英明

盆休みの期間を利用して、前から歩いてみたいと思っていた屋久島のトレッキングに出かけました。大阪空港から鹿児島へ、そこから七十二人乗りのプロペラ機を乗り継いで、屋久島空港へ。空港は海の側にあり、降り立つと亜熱帯性気候特有の少し湿り気のある生暖かい風が吹いており、旅心地と相成って南の島にきた実感が湧いてきました。由良駅を少し大きくした程度のターミナルビルを出ると、平成五年に世界自然遺産に登録された屋久島の風景が眼前に広がっていました。

その日は、レンタカーで屋久杉自然館に行き、屋久杉の特徴や江戸時代に盛んに行われた伐採の歴史やそれにまつわる人々の生活などを見学し、その後、明日の足慣らしにと樹齢一五〇〇年から三〇〇〇年ぐらいの屋久杉が生い茂る屋久杉ランドを二時間半かけて上ったり下ったりしながら巡ってきました。宿に着き、明日は、縄文杉（樹齢推定七二〇〇年）との対面だと高鳴る気持ちを押さえながら早めに床に就きました。

次の朝、強い雨の音で目が覚め、「これでは山登りは大変だなあ。」「どうしようか。」と家内と話し合い、まあバス停まで行ってみようかということになりました。前持って頼んであった弁当とミネラルウォーターをリュックに詰め宿を出たのが、四時四十五分でした。

バス停に着くと多くの人たちがバスを待っており、バスも登山客で満席でした。かれこれ四〇分ぐらいかかって、荒川登山口に着きました。

そこは、トイレの順番を待つ人たち、着替えをしている人、地べたに座って弁当を食べている人、体操に励む人等々これから縄文杉に行く登山者で溢れていました。わたし達も弁当のおにぎりを食べ、少し休憩してから、「さあ登るぞ。」と最初の休憩地小杉谷小中学校跡を目指し六時四〇分スタートしました。

穏やかな傾斜のトロッコ道の枕木の上を周りの景色を見ながら歩いて行きました。所々水たまりができていたり、上から滝のように水が落ちてくる所があったり、トンネルをくぐったりしました。五〇分ぐらい歩き、轟々と音を立て洪水のような水量（屋久島山間部の年間降水量八〇〇〇㎜超、京都府北部約二〇〇〇㎜前後、屋久島は一ヶ月に三十五日雨が降るといわれる。）が下流へ流れ落ちる川を渡ったら、やっと最初の休憩地に着きました。リュックを下ろしボトルの水をがぶ飲みし、少し雨が降ってきたため、薄いカッパズボンとポンチョを身に纏ってから、次の休憩地楠川分かれに向け歩き出しました。そこも同じくトロッコ道でしたが、今度は枕木が地面に埋もれていたり浮いていたりして、とても歩きにくくなりました。辺りの様子も徐々に鬱蒼とした森に変わってき、倒木更新の木（倒れた木の上に次の木が根づく）や切り株更新の木（伐採したあとの切り株に若い木が根づく）が点々と表れだし、屋久杉（樹齢一〇〇〇年以上の木でそれ以下の木は、小杉という）も見え出しました。ガイド付きの隊列の側に行き、説明を聞きながら歩いていると四十分ぐらいで楠川分かれにつきました。最初の出発地が標高六〇〇m（由良ヶ岳の頂上より少し低い。）ここで七二〇m、大株歩道入り口が九一〇m、最後の縄文杉が一二八〇mです。ま

た、ここからは、傾斜もきつい山道になっており一列になって歩き出しました。雨も強くなり、衣服や靴は、汗と上からの雨でずぶ濡れになりました。所々は、木の歩道が出来ていたり、階段が設置してあったりしましたが、その他は、自然の道であり、木の根が覆っていたり、道が崩れていたり、大きな石が露出していたり、至る所に水が溢れていたりし、大変歩きづらく大株歩道までは、休み休み登ったため、一時間二〇分ぐらいかかってしまいました。

さて、これからが待望の屋久杉が群生する地帯に入っていきます。雨は、絶え間なく降っていました。歩くこと三〇分ぐらいで、**翁杉**（樹齢二五〇〇年頂部は枯れてなく、周りは苔に覆われてナナカマドやサクラツツジ等の植物が着生している）が現れ、そこからまもなく**ウイルソン株**（周囲一三・八mの切り株で、中は空洞になっている）に到着しました。中に入ると、ひんやりとした少し神秘的な雰囲気が漂い、小さな祠が奉ってありました。空を見上げると、精気が落ちて来るような感じがしました。辺りは、まさしく、苔むした倒木や切り倒されて放置された木、土に埋もれ木等が点在し、日光が遮られた空間は、宮崎　駿のアニメ「もののけ姫」に出てくる鬱蒼とした森の世界がありました。至る所から溢れる湧き水でのどを潤し、大王杉目指し、疲れた足を引きずり登り始めました。ここまでくると標高も一二〇〇mぐらいであり、あたる風もひんやりとします。黙々と歩くこと一時間ぐらいで**大王杉**に到着しました。この木は、縄文杉が発見されるまでは最大の屋久杉で（樹齢推定三〇〇年、樹高二四・七m）ひとき わ大きく空に向かって聳えていました。そこからまもなく行くと、**逆杉**や二本の屋久杉が高さ一〇mのところで繋がっている**夫婦杉**が（樹齢推定一五〇〇～二〇〇〇年）見えてきました。あと少しだと疲れた身体を叱咤し、けもの道のような山道を登ること四〇分、歩き始めてから、約五時間半めざす**縄文杉**（樹齢推定七二〇〇年、樹高二五・三m、周囲十六・四m）が見えてきました。標高一二八〇mにある屋久島最大の杉で悠々と目の前に立ち構えていました。まさしく威厳に満ちた堂々とした姿に圧倒されました。辺りは、保護策として、観察台が設置されており、そこから樹木に近づくことは出来ないようになっていました。

観察台から写真を撮ったり、近くのガイドの話に耳を傾けたりしながら、疲れも忘れ、とてつもない長い年月をかけて屋久島の自然が創り出した雄大な芸術に暫しみとれていました。

往復十一時間、体力には少々自信がありましたが、この時ばかりは、帰りのバスに乗るのにもやっとのくたくたに疲れました。しかし、機会があればまた行ってみたいと思っています。

駅伝大会に参加して

6年　吉岡里奈

今年私は、宮津市駅伝大会の選手に初めてなりました。

毎日、夜に走る練習をしてきました。初めて走った時は、だいぶタイムがおそくなったけれど、毎日走っているとどんどんタイムが速くなってきました。タイムをはかる最後の日がやってきました。私は一秒でもタイムが速くなったらいいなぁとばかり、思っていました。走り終わってタイムを見て見ると、五秒ぐらいタイムが上がっていました。その時はとってもうれしかったです。選手発表をした時、私は一区の一番短いきょりを走ることに決まりました。決まった時、最後になったらどうしょうと言う気持ちでいっぱいでした。だけど、がんばろうと思いました。

いよいよ本番の日がきました。初め、由良の里センターに行きバスで行く人たちを見おくりました。それから補欠の有加ちゃんと九時から運動場や道路を走ったりしました。ほかの選手の人たちも運動場を走ったりしていました。私には、ほかのチームの人たちがとっても速そうに見えてだんだんときん張をしてきました。

スタート三十秒前、十秒前、スタートしました。私はスタートがおくれてしまいました。だけど、追いつこうとがんばって走りました。

たくさんの人が、

「がんばれ!!」

と応えんしてくれました。だから私はスピードもおとさずに走ることができました。第一中継所に着いてタスキをわたした時はとてもうれしかったです。私は、十一チーム中五位でタスキをわたせました。

ゴールに着いた時由良は六位でした。いままでの練習の成果が出てよかったし、くいの残らない駅伝大会になってよかったです。

6年　大森菜保子

駅伝大会当日、わたしは、少しドキドキしていました。里センターで、話を聞いてバスに乗りました。わたしは10区でした。10区は、上宮津小学校からでした。グランドで、アップや体そうをしました。10区を走る人を見た時、「とても、速そうな人たちばかりだなぁ。」と、思いました。

1位の人がスタートしました。その時、とてもドキドキしていました。

「6番。由良」

と、タスキをもらって、走り出しました。前はとても速くスタートしていて、後ろはまだスタートしていなかったので、前も後ろもだれもいないので、とても不安でした。でも、たくさん応援してくれたので、やる気が出てきました。「よし。力をぬかずにがん張るぞ。」と、気合い入れて走りました。でも、少しえらくなったので、自分で自分を応援しました。

ラストスパート。わたしは、残りの力を出しきりました。次の人が見えてくると、全力で走りました。次の人にタスキをわたしました。「がんばれた。」と思いました。ぬかされなかったのでよかったです。

由良は6位でした。みんながいっしょうけんめい走れたのでよかったです。とてもドキドキしたけど、思い出に残るいい駅伝大会になったのでよかったです。

6年　吉元晃平

ぼくは、初めての駅伝大会でした。ぼくが、駅伝の選手になるとは、思ってもいませんでした。練習に積極的に来ていたので、なぜか、自分の足が速くなっているのに気がつきました。津田さんの指導で、胸をはったりすることが、できたりしてきました。ぼくが練習に行こうと思ったきっかけは、友達の大河君にさそわれたのもあるし、ぼくは野球をならっていて、足の速さやスタミナも必要だからです。

練習を始めたとき四分四十秒ほどでした。その後、津田さんが、

「ペースを決めとけ。」

と言いました。

ペースを決めるのは、ぼくにとって、ちょっとむずかしいと思うだけでした。

でもその後、最初、速く一周に入ってくればいいことも、教わりました。そのかいあって、ぼくは、だんだん速くなってきました。足の調子がよくない日もありましたが、アップとダウンのジョギングはしました。つかれていないときは、五周、タイムトライアルが楽に走れました。

そして走る区が決まりました。ぼくは最初、十一区だったけど三区にかわりました。

三区は一直線だったので、走りやすいと思いました。

練習を始めて二週間ごろたったら、四分を切れそうなタイムが出てきました。ぼくのタイムはそのとき、四分三秒でした。ぼくにしては、よく走れるタイムです。その時点では、こう司君と同じくらいでした。

きょり千七百二十は、約八周半です。練習してきたきょりは五周だけど、ぼくは走れると思いました。

同時に運動会の練習もあり昼体を動かすことが多くなってきました。そのおかげで、走れるのかもしれません。そしてその日ぐらいに、四分三秒から、四分に、タイムが上がりました。わずか三秒ですが、ぼくにとって四分は、すごいタイムです。こう司君は、その日いっしょに走り、三秒ほどの差で負けてしまいました。

そのよく日、昨日のタイムが四分だから、ぼくは、何としてでも、四分を切ろうと思いました。その気持ちが現実になりました。この日のタイムは、三分五十七秒でした。ぼくは、まだ走れそうでした。よく日ぼくは三分五十を切りました。これがぼくの最高タイムになりました。

本番の一日前、その日は、二キロジョギングをして終わりました。本番が近づくにつれ、少しわくわくしてきました。この日は野球の合宿もかさなっていました。とてもねむれないと思いました。しかし、十時にねむれました。朝になり、少しきん張が出てきました。朝ごはんを少し多めに食べて里センターに行きました。里センターでは、みんな用意して待っているようでした。三区のぼくは、バスに乗らず、少し里センターに居てから山田さんの車に乗り行きました。

その後、アップをし、てん呼があり、その後また一キロほどアップし、最終てん呼がありました。

由良を一区の人が出発したとき、きん張がすごくしてきました。中けい所から、ゼッケン六番が見えたとき、いよいよだと思いました。

走っていると中、二人にぬかされました。でも、練習が本番に出ました。よかったです。

ぼくは、11区を走ることになりました。

これまで、毎日夜に走りに行ってタイムを上げました。

実際に一回コースを走りました。

けっこう長くて大へんでした。

ぼくは、なお子ちゃんからタスキをもらいます。

当日の前の日の夜、ゼッケンなどをもらってがんばるようにしました。

その夜にぼくや大河君、晃平君は、合宿なので、みんながうるさくて、ねるのが11時ぐらいになりました。

当日、開会式が終わって、11区に行きました。

ほかの地区の人もたくさんいました。

ぼくには、補欠がいないので、新宮のおっちゃんといっしょにアップをしました。

6年　飯田紘司

軽くランニングをしました。五十メートルぐらいのきょりでダッシュをしました。はやかったです。

ぼくは、一、九八〇メートルのコースです。

そこには、宮津市南部ブロック陸上記録会で八百でいっしょに走った人ばっかりでした。

家の人や、お母さんの家のおばあちゃんやいろいろ見に来てくれました。

一位の人が行きました。次々、行きました。なおちゃんは、6位で来ました。前も後ろもいませんでした。

走っていると中に、ちがう地区のおばあさんや、おばさんが、「由良が来た！由良がんばれ！」と言ってくれました。

と中におばちゃんやおばあちゃんがいて、応えんしてくれました。

今ざき先生も応えんしてくれました。うれしかったです。

最後、しんけんに走りました。

ゴールにお母さんがいてほめてくれました。

うれしかったです。

けっきょく6位のままでした。ぬかされなくてよかったです。由良はそう合で11チーム中6位でした。

つかれたけどすごく楽しくていい経験になりました。

丹後ちりめんそめもの体験

6年　岡本早紀

体験に行くまでのバスでの道のりが短く感じました。

初めにお話を聞きました。ちりめんの作り方やまゆの話を聞く事ができました。分からなかった事が分かってよかったです。まゆが「カラカラ」と音がするので五年生のわたなべさんがはさみで切りました。中には虫が入っていました。すこし気持ち悪かったです。みんな「うわ～。」とか「え～」。などいやな言葉が返ってきました。

次にそめ物をしました。切りぬいてある紙の上から絵の具をぬっていくやり方と、ドロッとした液体の中に絵の具をちらしてそれをちりめんにつけたらうまくちりめんに写っているというものです。

一番楽しかったのは流しぞめです。みんなの作品に、にているようでにていません。最初に先生がやった時びっくりしました。大きな声で

「うわーすごい。」

と、言いました。水の上にあった絵の具はなくてちりめんに全てうつっていました。

丹後ちりめんのそめものに参加してよかったです。来年もやりたいなぁと思いました。

私は、そめもの体験を初めてしました。初めは、どうやってやるのかなぁ、とばっかし思っていました。そめものを体験する所につくと、まず丹後ちりめんとかいこのことについて話してくれました。丹後ちりめんの作り方がよくわかりました。

私たちは、型ぞめと流しぞめを自分でします。まず型ぞめをしました。布に好きな絵をえらんでその上から型ぞめ専用の絵の具みたいなのでぽんぽん絵に合わせてぬっていきました。

私は、とんぼ、花、さくらんぼのもようにしました。

次に流しぞめです。まず水に絵の具を好きな所につけて、好きなようになるようにかきます。そして最後にその水の上から布をおいたら、手じなみたいに一しゅんで布にもようがつきました。思わず「ワー」と言ってしまいました。流しぞめも型ぞめも上手にできてよかったと思います。

ほかの人たちも自分でいい作品を作っていたのでよかったと、思います。型ぞめや流しぞめは最初はどんなのか知らなかったけれどやってみると、こんなに楽しいものなのだなあ、と思いました。いい体験が出来て本当によかったです。

6年　吉岡里奈

わたしは、今年ちりめんを作りに行きました。

ちりめんに絵を書く時に失敗しないかなと思いました。

そして、絵を書いて、できあがりを見ると、思ったよりうまくできてよかったです。

わたしの書いた絵は、キティちゃんやネコ、ペンギン、花、とんぼを書きました。

その後、マーブリングをしました。

水のりの上に絵の具をたらし、フォークでまぜてぬのをのせ水ですすぐとできあがりです。楽しかったです。また、やりたいです。

5年　山田りか

九月四日、そめ物教室に参加しました。

初め、丹後ちりめんの作り方や、出来上がった品物、いろんな糸、そしてそのもとになるまゆを見せてもらいました。

まゆのもとが、がということを初めて知ってびっくりしました。

まゆを切って中を見ると、茶色くなったさなぎが中に入っていました。

そめ物は、最初に型ぞめをしました。

自分の好きな型をとって来てステンシルみたいに、ブラシで色をつけていきました。

私は、トンボや花などをそめました。思ったより、かわいいのが出来ました。

次に、マーブリングそめをしました。

最初に、水のりの中に色んな色の染料を入れ、自分がぬのにうつしたいもようをフォークで作りました。

私は、四年生の時、マーブリングをやったことがありますが、ちりめんでやるのは初めてなので、

「こんなちりめんでやるんだな」とびっくりしました。

出来た時は、きれいに完成してうれしかったです。

そめ物教室に参加して良かったです。

5年　大森まゆ

5年　大森　彩

九月四日に染色体験がありました。

由良の里センターからバスで丹後織物工業組合という所に行きました。

参加した理由は、四年の時、しぼりぞめをした時失敗したから、

「今度は失敗しない様にがんばろう。」と思ったからです。

型ぞめというのをしました。

私はねこが好きだから、ねこの形にそめました。

型を決めるのは早かったけど、色を決めるのにちょっと時間がかかりました。

色を決めたら型の上から筆を回す様にしてぬりました。

回すときれいにぬれると教えてもらったからそうしました。

ぬり終わって型をはずす時、上手に出来ているかなとドキドキしました。

角を持って上に持ち上げる様にめくるとペリペリペリッと音がしました。

気持ちよかったです。

きれいに出来ました。

うれしかったです。

とんぼやなでしこなどの花の形にもそめました。

どれも上手に出来て大成功でした。

家に帰ってお母さんに見せると、

「秋らしいええのが出来たなぁ。色もきれいし並び方上手やなぁ。」と言ってくれてうれしかったです。

世界に一つだけの物が出来ました。

「公民館から」他の参加者は

6年　渡辺はるか　大森美沙
4年　由利美咲　山田栞奈
飯田紋佳　桝岡裕奈
矢野安希　中西亜里沙
森田沙瑛　大森　夢
山口晏奈
1年　中西勇翔
3年　浜本もも　園児　浜野颯人
浜野真椰

ニュージーランドに行って

栗田中学校3年　船野　大

まず、行きたいと思った理由は行く前に異文化を理解したかったこと、そして「世界規模で考える」という宮津市の目的を見直して、このフォーラムでの成長が期待できたからだ。

僕の目標は「世界規模で考えられるようになり、一生の思い出に残る体験をする。」だった。それは絶対に達成できたと思う。

外国の文化について、ある程度わかっているつもりだったけど、知ることの方が多かった。たとえばニュージーランドの家のつくりは1階建てが多いこと、人より羊が多いことなどびっくりすることがたくさんあった。

ニュージーランドに着いて、初めて外国に足を踏み入れたことに感動したし、日本と違うところが多く興味が持てた。日本は真夏で僕たちは夏休みなのに、こちらは真冬でコートが必要なくらいの天候だった。そしてなんと、一般道路の速度標識が一〇〇キロなんていうのもあった。

最初に行ったエトルアという都市は日本の別府温泉と泉質がよく似た温泉もあり、大分とは友好都市にもなっているところだ。

ここで第一回日本ニュージーランド姉妹都市フォーラムが開催された。始まってすぐは緊張したが、笑う場面もあり、楽しいものだった。

特に地元マオリ族の踊りは日本では見られないので、世界を見た感じがした。そして、迫力に感動し、目が離せず気がつけば見とれていた。

夕食のとき、僕らの隣に地元の男の子が座ってくれた。僕らは不安で固まっていたのに一人で隣に来てくれた。その男の子の勇気と親切さによって僕らの心も自然と開いて打ち解けていけたような気がする。英語で話をしたけどほんの少ししか意味がわからず、すごく悔しい思いをした。

フォーラム中は現地中学生と二人一組で、行動することになっていた。

パートナーとも、言葉の壁は厚かったが、ボディランゲージで思いを伝えることができた。

何に対しても積極的でやさしく心の広い人で、すぐ仲良しになれた。

そのパートナーは、ケンダマや折り紙に興味を持ってくれ、とてもよろこんでくれた。楽しかった時がすぎ、別れのとき、持って行ったお土産も渡せず、あいさつもろくにできないまま別れてしまった。それがこのフォーラムでの、一番の心残りなことだった。

ロトアルを出て、最終日は観光することができた。

ワイトモ洞窟の中はとても神秘的で美しく、癒されていく感じだった。そしてオークランドはとても都会でわくわくした。

ホテルでは日本の友達と一緒に、最後の夜を楽しく過ごし、遅くまで遊んだ。

帰りの飛行機の中で振り返ってみると、最初の機内食から、ニュージーランドで食べた最後の食事まで、ずっと肉を食べていたことに気づいた。これも食文化の違いかなと思った。

九州から北海道まで、日本から一緒に行った、たくさんの友達とも、とても気が合い、今の僕の財産になっている。

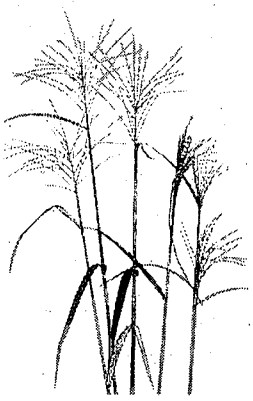
自分の語学力不足の確認ができ、英語をがんばろうと思えた。そして、ものの見かたや、考え方もちょっと変わった。今まで日本と言う国を深く考えていなかったが、フォーラムに参加し、日本をアピールすることで日本のよさを確認できた。

行けた環境が最高だったのかもしれないが、いつでもみんなニコニコ接してくれた。

日本に帰ってみると、日本人の無愛想さにも少し気がついた。

このユースフォーラムに参加できたことは、僕の一生の貴重な体験で、たった五日間しかなかったのが残念なくらいだった。これからの生活にこの体験が活かせるよう頑張っていきたいと思った。

短歌



藤本史代

青き背の魚にふる塩ざんざらとわが身の襞に滲みてゆかなむ
さわさわと人語の波に漂いてわれは透きたる魚となりなむ
渦潮の鳴門の海に吸われゆきこころは今し群青の魚

山口美子

戦時下に育ちし者の宿命か不用と知りつつタンスの中に
岩はだをたたき流れる保津川に脳裡をよぎる木曽の川音
夕まぐれそこはかとなき木犀の香を教えくれし亡父の笑顔よ

山田よしの

夏の日の大夕焼けは浴室の玻璃戸に映えて燃えさかるごと
電線に並びしつばめ尾を振りて一羽が去れば皆飛び去りぬ
夕茜うすく残れる西空へ「へ」の乱さず鳥の群れ消ゆ

大森萬喜子

雨蛙ポストに宿り一か月頭なでやる日毎の絆
世界遺産の佛像あまた並び立つ「祈りの道」展をひと日めぐりぬ
ちちろ鳴く静寂の夜のわれひとり「祈りの道」の観音浮かぶ

大森美智子

残暑にも耐え乱れ咲くコスモスにいのちの強さ美しさ見る
いずこより雲は来りて流れ行く窓キャンバスに午後のひととき
「作って」と頼みし庭の椎茸よ夫亡きあとにあまた芽を出す

とよ子

秋風が海を撫でたりあおいだり白波かぶるサーフィンの群れ
鵜のごとく黒き頭の一列に波間につづくを立ちつくし見る
栗拾う幼児(こ)の歓声がこだまする丹波の里の秋のしずけさ

坂本妙子

アルバムにときの過ぐるを忘れおり暮れ泥(なず)む日に亡夫を偲びて
そぼそぼと降り続く雨葉から葉へ音なく雫移りゆくなり
われはいま悠々として漂いぬ喜び哀しみ総て包みて

山口幸一

潦(にわたずみ)　涸れるを知らず赤とんぼ　卵しき産むさまを見ていし

特別攻撃隊第十六振武隊員、前田軍曹の詠歌。十九才の命を沖縄に散った。我が身になぞらえたものか。何とも名状しがたい心境。

不透明な癒着構造尚続くモラルなき此の国の未来を思う
公然と論議され初む憲法改正　戦中派によぎる苦き想い出

中西夏江

断ちがたき悲哀の充つる説経のひとり語りに愛はありたり
渾身の説経節の弾(ひ)き語り節(ふし)語りは魄を染めゆく
山椒太夫(たいふ)伝説の説経語りをいとほしみ葉月ひと夜の由良ゆたかなり

富士山登山

中西　衛

7月23日朝6時に由良を出発した。枝川隆亮さん、中西一雄さん、山田訓久さんと私の4人。

途中浜名湖SAで昼食をとり14時20分に白糸の滝に着いた。10本位滝があり一番左の滝が水量も多く迫力があり、滝つぼも見えて美しかった。

16時に富士宮口新五合目の駐車場に到着した。軽食をして時間をつぶしてから18時にいよいよ登山開始した。

新五合目（二千四百m）より六合目（二千四百九十m）まで30分位で到着し調子良いなと思っていたが、それからが大変だった。新七合目（二千七百八十m）20時30分着、元祖七合（三千十m）。八合（三千二百五十m）午前一時30分着。九合（三千四百六十m）3時20分着。

山小屋の灯りが見えているのになかなか到着出来なかった。途中でヘッドランプの電池（単三）が切れた。三日月が目より下に見えていた。

最初、人も少なかったが終わりの方では大分人が続いて登って来た。息切れがして、口で呼吸し、かなりバテて来た。もうやめようかなと思ったが、休むと少し楽になったので登りつづけた。山田さんが私のペースに合わせてくれて、又適切なアドバイスをしてくれた。彼がいなければここまで登れなかった。

九合五勺（三千五百九十m）到着が4時30分。大分明るくなって来た。気温が五～七度に下がり寒くなったので服を重ねて着た。空気の薄くなったのはあまり感じなかったが、休んだ後立ち上がった時少しふらついた。

九合五勺で温かいうどんを食べて体を暖めた。四時45分ごろ太陽が右の方よりのぼった。右のはるか下の方に宝永山が見えたが、雲がかかって駐車場は、はっきりとは見えなかった。

携帯をかけて枝川さん、一雄さんが何処にいるか様子を聞いた。すると今頂上にいる、あと30分位で登れるから登ってきたらといってくれた。しかしもう体力的に限度一杯だったので断念した。5時より下山始めた。砂利に足がめり込んで、すべって尻もちを二、三度ついた。横歩きをした。駐車場までが遠かった。駐車場到着12時30分。登り10時間半、下り7時間半かかった。

途中迷彩服の在日米軍が何百人、中学生高校生が何百人と登って来た。太陽光線が強く、帽子をかぶっていたのに、首すじや顔が日焼けして痛かった。空き缶、ごみが全くなく美しかった。山田さんによると20年位前は空き缶の山であったとの事であるが、今はほんとうに一つもなかった。足腰が痛く疲れたが、九合五勺まで登れたという達成感、満足感で一杯だった。午後一時ごろ帰路につき途中で食事をし、由良到着は夜一時半ごろになった。

自動車は枝川さんのキャンピングカー、運転は、枝川さん、中西一雄さんに大変お世話になった。写真はあまり良いのがとれなくて駄目だった。

「山椒太夫」説経節公演

中西夏江

東京都無形文化財指定、創立以来十八年間ご活躍中の八王子説経節の会(会長宮川孝之氏)二十四名の方が来由。八月二十四日午後六時から汐汲苑大広間に於いて「山椒太夫」説経節の公演が開催され、和やかな交流も出来たことを嬉しく思っている。

当日は百名を超える観賞者の来場で熱気に満ち、公演は大いに盛り上がった。歓迎する側の当地区からは、本年白寿の森田くま様による「山椒太夫のぞきからくり唄」を披露。その美声と舞台度胸、かつて由良小町と謳われた表情から溢れ出る明確な唄いぶりは、実に見事で拍手喝采であった。

説経節公演の演題並びにその内容を簡単に紹介させて頂く。

一、語り「山椒太夫　名付けの段、別れが辻の段」 東ノ宮美智子

「エイサラエイー　エイサラエイー　いのち輝け、エイサラエイー」と呼びかけるあでやかな東ノ宮氏はやがて物語の世界へ。由良湊で買われた山椒太夫に名のらぬ安寿と厨子王が姉を「忍」弟を「萱草」と名付けられる件。課せられた仕事の為、姉は浜路へ、弟は山路へと別れねばならない悲しみーを際立たせるべく時に簡潔な太鼓の打ち鳴らしは、磨かれたひとり語りのスタイルか、趣向か、と思いを絞るばかりの無常感を漂わせて切実な美しい語りであった。

一、弾き語り「薩摩派説経節山椒太夫　新作　安寿姫濱難儀之段」 薩摩小若太夫・艶語り　横山光子

「とうざいーとうざいー語りまするは……」と幕内から威勢よく始まる声、やがて艶を手に静かな雰囲気の横山氏、三味線の小若太夫ご両人の登場。

艶語りと三味線の弾き語りが適度な翳を交差させながら展開される。「山にては柴木の勧進(まつた)の意　浜にては潮の勧進いたすものあらば当人は極刑……」という過酷な三郎のふれを安寿に告げ、「女波と男波がどうときて、つつっと引いたる波を見て」と潮の汲み方を教える浜女。しかし、安寿は桶も柄杓も波にとられてしまう。泣き嘆く安寿の傍へ、自害を決心した厨子王が来る。二人が袂に小石を入れ、汐汲み岩から投身しようとする刹那「止めし者の御座あるは後の恵みと知られける」と結ばれるこの語りに投影されている仏教思想をやわらかに実感させて頂く。艶と三味線ーという出合いにも注目しながら、そのバランスがうまくとれて、説経節が継承されてゆく土の匂い、風の匂いのような憧れをもつことが出来た私達は本当に幸せであった。

早々に送って下さった「説経散歩　丹後由良」参加者全員の感想文集から抄出させて頂く。

「(略)汐汲苑の舞台に鮮やかな三つの花が咲いた。演ずる者と聞き入る者とが、回帰していく時間空間。というよりも空間も時間も超越している絶対的なものへの回帰。(略)由良が与えてくれた貴重な体験と、それを可能にして頂いた方々に深く感謝申しあげる。薩摩小若太夫(渡部雅彦)」

素晴らしい日本芸能を上演して頂き誠に有り難く、茲に観賞者一同厚く御礼を申し上げたいと思います。

付記・説経節の会会長宮川氏は、日本写真家協会、日本写真芸術学会、写真工房みやがわ等々、幅広い活動家。・東ノ宮美智子氏は、日本各地、イギリス、アメリカ、香港などで出演。主演女優として活躍。・薩摩小若太夫は、東京都小学校教諭。本名、渡部雅彦。長唄、三味線師匠に入門、集中的な稽古、努力を重ね、各種の公演に参加、共演など。二〇〇一年、五代目薩摩小若太夫を襲名。・横山光子氏は、水上勉作品を語ることで水上氏と一昨年共著で『五説経』を出版。各地、各学校で精力的に語り、会報も発行。

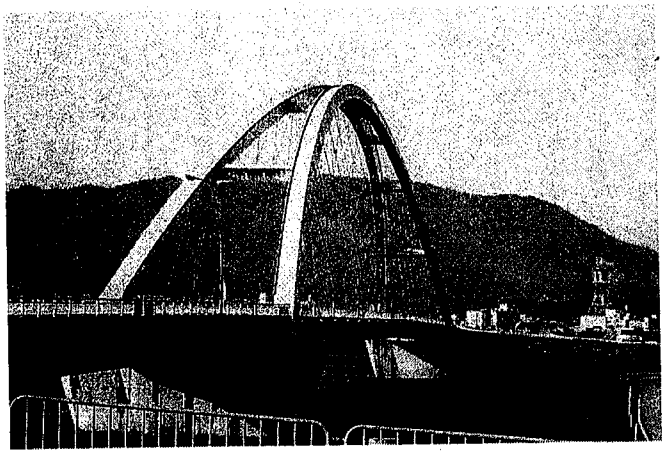
経ヶ岬から潮岬まで（No.3）

四方俊一

午前五時、夜明けと共に出発した。目指すは福知山市、府道綾部大江宮津線を歩く、普甲峠は標高四八二米で京への街道(京極高広が開いた)が通じる峠道、麓の岩戸から峠を越えて中茶屋まで立派な石畳の街道が今もある、普甲峠は平安期開創の普甲寺跡があり今はスキー場となっている。その東、寺屋敷集落に普賢堂が建つ、頂上の五輪ヵ尾を始め附近は中世の戦場であった。文明元年（一四六九）永正四年（一五〇四）にはここを砦とする丹後守護一色側と、若狭守護武田側がそれぞれに但馬山名・京都細川方諸将を味方に付けて大規模な攻防を繰り返した。明応七年（一四九八）五月二十九日には、丹後守護一色義秀は国人の反乱に遭ってこの山で自殺した。この峠には今も大きな松の木が永い風雪に耐えて残る、名を「丁半松」と云い旅人が木陰で一服した時、賭博をしたものと思われ当時の風景が偲ばれる。峠を越すと「中の茶屋」の村落で旧街道沿いに農家がある。多くの旅人が峠の上り、下りに合わせて一服したものと思われる。更に足を進めると「大江町」に入り仏性寺である、大江町を源とする千丈ヶ原が二瀬川となり下流は宮川となって由良川に合流する。この二瀬川の所に「鬼ヶ茶屋」がある、その昔、源頼光が鬼退治の折、ここに休み、二瀬川に人の死骸の流れるのを見て賊の居る事を悟った、と伝えられ近世は旅籠「桝屋」として隆盛を極めた。裏山には頼光腰掛岩と云われる大岩がある、腰掛岩の下の道は宮津藩が作った「普甲道」と云われる京街道があり鬼ヶ茶屋もこの辺りに在ったが府道が出来てから現在地に移転した。「大江山鬼退治」の伝説に伴い数多くの伝説に関わる資料が残されている、特に「桝屋」には鬼退治の襖絵や酒呑童子が使用したと云う茶碗等があり弘化年代（一八四四～四八）に「桝屋」が出版した「酒呑童子由来記」の版木を有する。この仏生寺を下ると「毛原」に着く、宮津街道が開かれる以前は、毛原村を通って栃葉を通り北上して辛皮から普甲山と杉山（元普甲）の鞍部を小田へ越えていた。毛原を過ぎるとKTR大江山口内宮駅に出る、「元伊勢内宮」は宮津街道に沿うて有り旅籠・飲食店が在り各々の家が屋号を持っている。更に足を進めると外宮の豊受神社が在る、このように「元伊勢」と称する所は近畿地方に二十数ヶ所存在するという、一説によると橋立の元伊勢から現伊勢まで移動の際、休憩した所が「元伊勢」として残っていると云う。国道一七五迄、出発してから二〇キロ、時計は午前十時「河守」に着いた、宮川沿いの宮津街道と由良川沿いの河守街道の出合う所、水運・陸運に恵まれ当地方の要衝として早くから開けた。古代・中世を通じて川守郷の地。「由良川の水運」山陰道から奥丹後へ通じる要路に当たり、宮津街道はその唯一の街道であった。川守は旅籠も発展し賑わった、しかし物資輸送の幹線は由良川の水運で、寛保二年（一七四二）の記録では有路船十二船、神崎船四三船が就航している。その由良川も一度大雨となれば忽ち荒れ狂い、増水位六米以上の洪水は人々に惨害を与えた。享保元年～慶応三年（一七一六～一八六七）の一五二年間に三〇回の洪水が襲っている。この洪水の多い町、川より高い山手側に住宅を築き水害の多い低地は桑畑にして水

から我が身を守った、故に「養蚕」が普及し重要な産業となって京都府下でも有数の産地となり「蚕さん」と呼んでいたが現在は経済の変化で正に消え去らんとしている。足は国道一七五を福知山市に向けて歩く、R一七五とR一七六が交差する所が福知山市の「下天津」である。近世には由良川水運の船着場が有り牧川流域の物資の積み降ろしも行っていたので宿屋が多く、現在も屋号の着いた家が多い、宝暦一三年（一七六三）八月に認可されたが荷揚物資は塩と米、積降ろしとして桐実、蒟蒻玉、紙草（こうぞ・三椏）が認められていた。下天津から右折するとその道は三岳山に通じる道であるが更に足を由良川沿いに直進する。そして「勅使」に達するが小さな祠の所を左折して由良の堤防上に出て福知山市街に向かって歩みを進める。駄々広い由良川水域の平野地帯であるが福知山平野の北西端であって農耕地帯である。暫く歩くと由良川と牧川の合流点に達する、上天津である。牧川は兵庫県但東町との境に在る夜久野の板生川から始まる大河川であり増水時には由良川の水と牧川の水が合わさり天津の田圃は全面に冠水する。昼時近くの福知山市街を右手に見ながら「音無橋」に着く。「音無橋」は由良川の中流部として福知山市街地と猪崎、三段池公園を結ぶ重要な橋である。そこから市街地に入り福知山城に達する。「福知山城」、天正七年（一五七九）丹波に進撃した明智光秀が、この地に在った横山城を落城させ福知山と改名、近世的城塞に改修したのに始まると云われている。天田地方は古来より「古墳」「遺跡」の多い所でもある。北を加悦町、東を大江町、綾部市、南を三和町、兵庫県市島市、青垣町、西を夜久野町、兵庫県但東町に接する。京都市へ六〇キロ、大阪市へ七〇キロの地に有り江戸時代から政治商業都市として栄えた、又、京都・大阪と日本海側を結ぶ街道の結節点でもあった。そして丹波西部の生産物の搬出は、多くを福知山から由良川の水運に頼った。福知山城下町の東辺には由良川に並行した山陰街道の宿場町として発展し、本陣・脇本陣・旅籠が有った。又、由良川水運と四方から集まる街道の中心として呉服町、上・下柳町、東・西長町、広小路等に問屋や卸売商が集中して、在郷への中継商業地の機能を果たしてきた。由良川水運は江戸期には、町内に一七軒の船屋が指定されて、それらによって独占的に行われた。しかし明治三二年に大阪から福知山へ鉄道が開通し、同三七年に東舞鶴迄延長すると、海産物は主として舞鶴から入るようになり、由良川の水運は激減し、街道沿いの宿場も寂れた。そして鉄道の発展と共に町の発展は駅付近が最も活気がある様になってきた。一方、官公署の出張所が置かれ明治三〇年の工兵第一六大隊に続いて、翌年には歩兵第二〇連隊が置かれ第二次大戦は軍都であった。戦後は陸上自衛隊の駐屯地となっている、そして旧陸軍の演習地（長田野四〇〇ヘクタール）が工業団地に変化し従来の水害常襲地域の汚名が商業都市として名誉を回復した。車が激しく行き交う国道九号線、足は歩道を歩く、土師から長田野へは登り道であるが登れば平坦地が続く、工業団地を二分するように通る道路、高速道路のインターチェンジを過ぎると道路は下りになる。工業団地を抜けると集落に入る。飲食店で昼食を取り再び歩く。江戸時代、丹後、丹波から京都へ向かう道を多くの場合「京街道」と称した。「丹後宮津～普甲峠～中茶屋～仏性寺～元伊勢～河守～天津～福知山～長田～多保市～池田～生野～千束～水原～井尻～桧山～須知～観音峠～園部～八木～亀岡～篠～老ノ坂～

桂」この径路は「山陰街道」とも云われ多くの旅人が行き交った。この地は「多保市」、塔の有る寺の前に市場があったことから付いた名と云われている様にこの地域は寺塔の古跡が多い。そして「三俣」は昔、綾部藩に属し京街道が通り抜ける村として栄えた。その京街道の渡し場を安井川と云い、そこを越えた所に下町と称する三町ばかりの町並が有ったと云う「堀越」である。国道九号は自動車の往来が激しいので旧道を可能な限り歩く、旧道は集落の中なので静かである。やがて「萩原」に着く。「萩原」は「丹波誌」によると「……古萩多く生せり依って之を地名とす」と有り、この地も綾部藩領であった。ここを境として道路は福知山市と別れて「三和町」に入る。天田郡の東端に位置し細見川・川合川・草山川が由良川支流土師川に合流する地点に僅かに平地に有る山村地帯である。三和町の芦渕まで一気に歩く、ここは下川合、川上合を通り国道一七三号線に通じる交差点であり、この先には安産の神、大原神社が鎮座する。同社は、仁寿二年（八五二）丹波国桑田郡野々村荘堅原に祀られたが、弘安二年（一二七九）九月当地に遷座し、応永四年（一三九七）十月当地の領主大原雅楽頭によって社殿が造営され、正一位の神社を許された。天正年間に明智光秀のために社殿が焼失したが、嘉永十一年（一六三四）藩主九鬼氏によって再興され、明治に至る迄同氏族の崇敬を受けた。大原の人はお産の時は神域が汚れると云って、神社の前を流れる大原川の下流対岸の一画に村共同で建てた「産小屋」でお産をした。時計は午後三時三十分。三和町役場に向けて懸命に歩く、可能な限り京都に近づく為。千束が町の中心地で農協、役場がある。この地域一帯は丹波高原の西端に位置した農村であり江戸時代より各領主が錯綜して支配した、養蚕は明治の頃から盛んで村の重要な産業であった。戦後は米麦、木炭薪の産物に頼らざるを得なかったが昨今は燃料革命の波に呑み込まれ漸く椎茸栽培に活路を見いだしている。この地方の農家には、古来、冬期の農閑期に、亀岡市の南部、別院地方から大阪府の北部、能勢地方にわたる地域へ寒天の製造に出稼ぎに行く者が多かったが今は衰微した。当町は地勢上、水田が少なく、大正期から増加する人口と我が国の食糧問題解決の国策に沿って昭和七年には多数の満州（中国東北地区）開拓移民と開拓青少年義勇軍を送り、多数の犠牲者を出した。第二次大戦中の昭和十九年には、南方派遣待機中の陸軍部隊五〇〇名により、千束野、梅原、川内ヵ野の開拓を行って甘藷を栽培した。「菟原下」、「菟原中」、「大身」、「三軒茶屋」と続く。「菟原中」から丹南三和線が分岐して篠山市に通じており、西北に流れる友渕川とほぼ南西に流れる大身川が合流して土師川となる。時計は午後六時、未だ明るいもう少し歩ける、九号線と一七三号の交差点に着く、今宵は、近辺の静かな所で野宿するべくテントを設営する。国道から可能な限り離れて「橋詰」集落の神社とする。夜の天候は良し、天高く星をながめつつ静かにまどろむ。午後十時。（次号に続く）



旅は気儘(きまま)に パート13

丹後由良ターミナルセンター

台風二十三号の被害に遭われた方々を、心からお見舞い申し上げます。近年では感じた事のないこわい体験だと思いました。自分事では被害もなく、電気の有り難さを痛感致しました。電気がついてからのニュースを見て少しずつ入っていた、宮津、舞鶴の被害状況が、想像以上だった事を知り心配しています。二十日の当日は、交通機関の寸断により勤務先から帰れない方々があった様です。午後からは列車も止まりました。二十一日は完全ストップとなり、どこか通れる所が……の祈りもむなしく、鉄道も道路も寸断されました。列車の通らない線路内を、飛んできたさまざまな物を拾い集めながら、来る時に見た、小学校体育館と元農協倉庫の間の大きな木が根こそぎ倒れている光景が台風のすごさをみせつけている様でした。こんなにひどい事になると教えてくれている様でした。駅舎そのものは大丈夫でほっとしていますが、正面玄関横のシンボルだった灯台がすべてこなごなにこわれてしまい、本当に残念に思います。今は写真の中に残っているだけとなりました。その残骸を中学生の男の子二人が一生懸命に片付けを手伝ってくれました。ありがとう!!

駅前通りの桜の木も、あちこち折れて痛々しいです。その痛みの中、新潟中越地震があり、目を覆いたくなる様な映像が映されています。恐かったでしょう……余震もまだまだ続く中、疲れ、ストレスが溜まってくることも心配ですね。寒さと、日常生活の不自由さを、暖かな家で、食事をしながら、テレビを見ている事を、申し訳なく思いながら、心を痛めています。夕方なのに火災がなくて良かったと思うと同時に、阪神大震災の教訓が生きたのでしょうか。タンゴ鉄道は、円山川の氾濫により二十二日、二十三日の二日間は、西舞鶴～丹後神野の折り返し運転、二十四日は久美浜まで延びました。二十五日になって西舞鶴～豊岡間、宮福線も開通になり平常通りになりました。終わりのない自然災害は、いつやってくるかしれない恐いものという事を思い知らされましたが、まだまだ直接の恐さを知らない今、どんな備えをすればいいのかと考えてしまいます。どこでどんな状況で災害に遭うのか分からない不安が先走ります。今回はごく身近におきた災害もテレビで映されて、本当にすごい現実となりました。寒さにむかって、余計に大変な事もありますが、関係者の方々、ボランティアの方々が一生懸命に暖かな気持ちで活動されている姿は寒さを忘れさせて下さいます。一日も早く元の生活に戻られます事を心からお祈り致します。がんばって下さい。

あいさつで
心をつなごう
由良のまち

由良幼小ＰＴＡ母親委員会

シベリアの思い出(2)

田中貞彦

再び公主嶺へぬかるみの道を歩き出す。昔の軍歌に「どこまでつづくぬかるみぞ、三日二夜は食もなく、雨降りつづく鉄かぶと」を思い出す。夕方になってやっと公主嶺に到着。ここは元戦車隊の跡でアルコールの入ったドラム缶が何本も転がっている。内務班を割り当てられそれぞれの班に落ち着く。やっと人心地がつき後は帰国を待つだけだ。班内では何もすることもなく各々に故郷の自慢話やウマイ物の話に花が咲く。無線機で凡ゆる放送を傍受する。内地では東條大将以下軍首脳部が戦犯として身柄を拘束されたとの傍受もあった。公主嶺に入って一ヶ月も過ぎ九月半ばになれば満州の朝晩はもう寒い。列車が入り次第帰国するとの伝達もあり又ソ連兵も「ヤポンスキー、トウキョウダモイ」(日本人は東京へ帰る)と言う。夏服を冬服に着替え列車の入るのをひたすら待つ。九月十八日頃(定かではないが)遂に乗車命令が出る。列車といっても貨物車で真ん中より左右、上下二段に仕切ってある。つまり四部屋の感じで真ん中にストーブが置かれてある。一貨車四十人。つまり一段十人が居住する。然し帰国するのは列車が南下するのに如何に満州といえストーブは要らないだろうと一寸不振に思うが誰も何も云わない。吾々は上段を与えられる。一升十人は少々きついが帰国するのだから我慢だとお互い納得する。列車は公主嶺から南下し朝鮮経由にて日本に帰る。吾々の部屋?には大阪出身の笛吹軍医大尉、博多出身の末広少尉、その他満豪開拓青年義勇隊の十六才の少年等と起居を共にする。(すでに亡くなられた方、今尚御厚誼を戴いている方も多く居られるので敢えて実名を使わせて頂きます)列車に乗り込むとやはり故郷の話、もう将校も兵隊もなく皆が一民間人になっている。まだ列車には機関車は接続されていない。機関車が接続される場合、この三十車輌程連結されている列車の南か北か。即ち南に接続されたら当然列車は南下、即ち審陽から朝鮮方面へ、若し北方向に接続されればソ満国境方面、でもそんな事はないだろう。ソ連兵も「ヤポンスキー、トウキョウダモイ」と云っている。二日程経った頃ソ連軍指揮官の車輌が北向きの最前列に連結され又機関車も指揮官車輌の前に北向きに接続された。これでは列車が北上するのは必至だ。しかし古兵達は北上してもハルピンからウラジオストックへの線路があるからウラジオストックから船で日本に帰るのだ。朝鮮は引揚者で混雑しているのだろう。と知った振りの説明をしてくれる。もうこの頃になると夜は大分寒い。九月下旬列車は遂に北に向かって発車する。古兵が云っていた様にハルピンからウラジオストックへ走ってくれる様に願うしかない。列車は走っては止まり、止まっては走りの繰り返し、その上速度も遅い。そのうちに見覚えのある新京を過ぎハルピンに近づく。ハルピンから牡丹江の方へ曲がる筈だと云う古年兵の声も聞こえぬ様に列車は北上を続ける。もう十月中旬になれば満州では雪もちらつく。夜は零度以下に下がっているだろう。もうストーブは炊き続ける。貨車の扉は閉まっているのだろうから上段の者から「暑いもっと火を落とせ」下段からは「もっと炊け」の声。でもこんな事で喧嘩している場合ではない。す

ぐにお互い納得し静かになる。狭い列車の中は毛布の敷きっぱなし。一ヶ月以上も過ぎると体がかゆくなってくる。虱の発生だ。昼はシャツを裏返し縫い目についている虱を取りランプの中へ入れ唐揚げだと皆楽しんでいる間はよかったが日毎に増えてくると楽しんではいられない虱取り競争だ。列車は相変わらず北上を続け北安という国境に近い街の入口で退避線に入る。ここで機関車に水と石炭の補給をする。「ここで約一ヶ月停車する」と伝達があった。全てソ連司令部の云うがままで吾々には一寸先の事は分からない。炊事は車外で行われた。吾々が停車している間にも日本人を乗せた列車が何本も国境方面に向け通り過ぎて行く。シャツを着替え虱のついたシャツは水に浸けそのまま一晩車外に干す。明朝シャツはピンピンに凍りついて虱は真っ赤になって死んでいる。この時はまだ分からなかったが虱は死んでいるが卵は死んでいなかった。停車して数日後車外が騒がしいので覗いて見るとS上等兵（この人は召集前国境近辺の警察署長をしていた）が一頭の牛を屠殺しようとしている。足をしばり、目かくしをして数人で押さえつけ眉間を十字ツルハシで殴りつける。彼は警察時代に経験があるそうで案外簡単に成功する。その夜は牛肉のたっぷり入った肉汁のごちそうだ。その後も馬や豚の屠殺が時に行われごちそうにありつく。ソ連へ連れて行くこれ等の動物の数が段々と減ってゆくのでソ連司令部から後になって禁止令が出る。停車中の列車で作業もあまりなく退屈している時に笛吹軍医や末広少尉が中心となって俳句の会が催された。最初はあまり関心がなかったが他の車輌からも参加する様になり大分盛り上がってきたが貨車の中の部屋？が一層せまくなるので将校が来る時は必ず何か食べる物を持ってきてもらう。部屋の貸し賃だ。この時点ではまだ食糧等は貨車の屋根に積んであり、甘味類は各人が持っていた。昼間の使役のない時は車外に出て体操をしたり、時に豚が民家から逃げてくるとソ連兵と一緒になって追いかけ、ソ連兵のマンドリンで撃ったりして時間を過ごす。この頃になるとソ連の若い兵隊とは大分馴れてきて手マネ、足マネで、又覚えたての片言のロシア語で話す様になる。若い兵隊は殆ど教育も受けてなく前にも記した様に人員点呼さえ満足に出来ない彼等だが一人一人は案外単純で人なつこい。然し将校となると仲々のくせもの、又政治将校と称して共産党員で軍の内部に目を光らせている者もいるのでうかつに話も出来ない。約一ヶ月程過ぎた頃やっと列車は出発する事となる。北安（ペーアン）の街を過ぎ又孫呉（ソンゴー）の街で停まる。ここは日ソ戦が始まった時に大激戦があったと後になって聞く。孫呉で停車中に、夜中に「各隊より十人宛使役を出せ」と指示が出る。隣の線路に入ってきた貨車に石炭の積み込み作業を徹夜で行い朝方作業を終えて隊に帰る。この石炭もソ連が戦勝国の権利として持って帰るのだろう。孫呉駅で止まっている間にも何本もの列車が日本人（旧軍人）を乗せて通過して行く。日本人の乗っていない貨物列車にはこの石炭以外に満州での戦利品として工場や凡ゆる施設を破壊していろいろな物品を持ち帰ってソ連の戦後の復興に役立たせるのだろう。やっと孫呉を出発して十二月二十八日遂にソ満国境の街黒河（コッカ）に着く。小生満二十一才の誕生日をこの北満の地で迎えるとは夢にも思ってもいなかった。公主嶺を出発する時から予感はしていたが本当にこの地に来るとは。激戦の跡も生々しく黒河の街は一軒としてまともな家、建物はない。丘の上に並ぶ民家の一軒に入る。屋根は

なく塀もくずれわずかに風を避けるだけの建物だ。真冬の国境の街、昼間でも零下二十度は超えているだろう外にいるよりはましだ。家の中は家具一つなく壁板もはがされている。吾々より先に通過して行った日本兵達がはがして暖を取ったのだろう。夜に入って益々風も強まり猛吹雪になる。東海林太郎が唄った「国境の町」の様なのどかな街ではない。吾々も残っている板をはがして屋内で焚き火をする。壁にもたれウトウトする顔は炎を受けて熱い。防寒外套を焦がさない様に気をつけながら。壁にもたれていると前は熱いが背中は凍りついて外套が壁から離れない。これが北満の冬の厳しさだろう。黒龍江(アムール河)が凍結したら対岸のブラゴエスチェンスクに渡る。との連絡が入る。十二月三十日第一回目渡河。食糧、服等をソリに積み十人一組で前から引っ張り、後ろから押しながらアムール河を渡る。河の上に出ると寒風が一層強まり雪も舞う。吐く息が顔に凍り付きまつ毛が白く凍り目も開けられない。ソリを引きながら片手で頬を叩き目鼻の凍傷を防ぐ。河の上は平でない。凍結寸前の流氷が重なりそのまま凍結した為氷上はデコボコで唯歩くのが精一杯それにソリを引いているので困難この上なし。体にうっすらと汗を感じるが顔や手足に感覚はない。対岸まで一粁、いやもっとあるだろうか。やっと渡河完了。ソリを引きながらブラゴエの街に入る。ここも国境の街、たいした建物もなくひっそりしている。しかし学校や人家は黒河と大違い。天井も窓も立派についている。戦勝国と敗戦国の差か。荷物を指示された場所に置き一服。小休止の後黒河に引き返す。ソリは軽くなったので歩くのには楽になるが夕闇が迫り風雪は強くなり前も見られぬくらいだ。やっとの思いで宿舎に辿り着く。まだ四時前という時刻なのに北の冬の陽の落ちるのは早い。火を焚き食事をする。誰も何も言わないくらい疲れきっている。後の壁にもたれウトウトする。油断すると火花が散って防寒服を焦がす。ウカウカ仮眠も出来ない。一日休み。即ち昭和二十一年一月一日残りの荷物をソリに積み再びアムール河を渡る。今日は雪は少ないが風が強いので寒さが一層こたえる零下三十度近くになっているらしい。皆唯黙々と歩く。河の真ん中くらい迄来たときもう歩けない。体はホカホカと温かいが顔や足が痛い。風が強いので正面を向いて歩けない。「どうにでもなれ」と自分一人雪の上に大の字に寝ころがる。体の汗ばんだ熱気と外気の冷たさ。疲労と睡眠不足で一足飛びに睡魔に襲われていく。このまま寝込んだら極楽へ一直線。と思った瞬間小坂さんに大声で叩き起こされた。「馬鹿者こんな所で死にたいのか」と吾に返り再び皆と歩き出す。また寒風が吹いてきた。防寒帽、マスクをしていても顔は痛い。下を向き顔にあたる風を避けながら進む。悪戦苦闘の末やっとブラゴエチェンスクの街に入る。ソ連人の見守る中指示された場所に荷物を降ろし小隊ごとに二階建ての建物に入る。さすがペチカが焚かれ中は暖かい。体が暖かくなると左足親指と右目下が痛くなった。「あ、凍傷だ」とすぐ気づき医務室の笛吹軍医に診てもらう。やはり凍傷だ。薬をつけてもらう。今日から当分は軍隊で言う練兵休。外での作業は中止。ペチカの当番、舎内の清掃等ですごす。顔の凍傷は面の皮が厚いせいか案外早く痛みは取れたが足の痛みは取れない。他の兵隊はブラゴエの駅で毎日満州から運ばれてくる食糧品等戦利品の荷卸し作業をさせられている。ヤポンスキートウキョウダモイ。が酷寒の地、シベリア大陸に上陸してしまった。

自分の道（上）

濱野路　大森　孝

▽誰しも人には〝天職〟といえるものがあり、それをできるだけ年少の時期に捉えて、早く進路を選びとって、迷わずつき進み、実績を積み上げ、向上して行くのが善く生きる秘訣であろうと思う。自立し、成功を遂げ上手に世渡りもできるのではないか。

▽私がそうした〝天職〟という言葉や、そのことについての知見を得たのは、晩くて、既に教職に就き、何校かを経験した中で、中年過ぎて、京都府の八幡高等学校で勤務していた往時。偶々、古本屋で手に入れた『吉田茂伝』は著者が緒方竹虎氏？であったように思うが、記憶に自信がない。伝記の中の一節で読むことが出来た。（ハードカバーの本）それは大要次の通りであった。（以下）

▽吉田茂氏が首相を辞して、身辺を整理して室内に在った時、警護官として自分をずっと守衛してくれていた男性が訣れの挨拶にやってきた。その守衛も、現在の任務をやめるという。

▽吉田氏、『長い間、御苦労さんでした。これから（世渡りが）が大変だが、貴方は未だ若いし、前途洋々だから、早く〝天職〟を見つけて、人生を立派に生きて行って欲しい。云々。

守衛、『……』

吉田氏は人生の先輩として、若者に諭した。助言者であり、元上司はこの時は人生を生きぬいた顧問の心境で話したものだと思われる。

▽次に、本題の私の進路は〝天職〟に適っていたかどうか。経過をたどりながら検証してみることとしよう。

▽自分の将来を思い描いて、12才の少年が（思春期前期）それなりに決めているということは衝撃であった。はっとして、『孝君、将来は何になるん？』と玉垣肇君―幼友達に問題提起された時は、はっとして、思わずしらず、瞬間居ずまいを正したことを憶えている。小6は2学期だった。

▽秋の日山の神の祠の清掃が終わっての帰りみちで、第一日曜の昼にさしかかっていた。（このあと太平洋戦争が勃発した。）秋風が身に沁みる金剛丸の畷道が、〝浜の路〟の踏み切りを越えると、所謂由良地区の第一号幹線道路が、丹後由良駅の方へ向かう農道と分岐する局所が語りあう場所となった。外の数人の仲間を先へ送って、肇君はそこで足を止めて、こんな人生にとっての大問題を問いかける。日々毎に時勢に流されて、そこ迄意識していない私には答えようがない。私『さあ、まだ決めてないんだ。……まだ先のことだし……。』そういうのがやっと。肇君は『僕は裁判官になりたいと思っている。』彼は小6の秋には判然と将来の目標を私に語ってくれた。

▽私にとって、将来を自信もって語る彼は一際先覚的で、メリハリがきいて、この時一段と大きく見えて驚異だった。

▽小6に上がってから、毎月第一日曜の午前中に行事として行われる山の神の祠の清掃（浜の路の妙見山へ詣でる、向かって左側の老杉の下の地蔵の祠）こそが、肇君が自立と将来設計の遅れている私に進路選択への決意を醸成し、それとなく助言してくれる大切な時間と場所であった。思えば、舞鶴市引土に母親の親戚のあった彼は、由良の中でも無自覚にその日その日を送っていた私などと較べると先導的存在として私を啓蒙してくれて

いた。

▽昭和17年の正月を迎えると、肇君はより具体的に訊ねるのだった。(彼の手廻しは速かった。)『孝君は中学進学は舞中にするん。で、どこに決めたん?』私は内緒にしていたのだが、彼には包み切れずに、『舞中にしたんや。』すると彼は吾が意を得たりとばかり、『そう。僕も舞中にきめている。』大きくうなずいた。その上で宮津中学を受験する3人の名前を次々と挙げた。『舞鶴は全部で5人おるんやで。舞中の方が多いな。いつも乍ら先を越す。

▽冬の金剛丸の畷道は、由良川の川上から吹きつける風が寒く、それこそ局所に立ち止まっているのが辛いー容赦なく川風が少年の身体を吹きさらして、マフラーや帽子さえも抑えなければ田圃へ飛び去って行く。一度は雪の進軍を由良で経験する。深い積雪の中を、浜野路の墓地を長靴で泳ぐようにして、山の神の祠の除雪を味わったことがあった。昭和17年の冬は雪が積もった。

▽今は帰らぬ昔の出来事となったが、12才の少年達がそれぞれ山のような希望を抱いて山の神の集団に結集して、真摯に懸命に生きぬいていたことを思うと涙が溢れて仕方がない。懐しい、幼友達の思春期前期を駈けぬけた群像である。(その金剛丸には帰化植物であるアメリカ月見草が未だに〃タンポポ〃のように、秋でも、いつでも土手に咲いている。呼べど帰らぬ夢多い少年の日々を証拠だてでもしているのかのように)

▽ただ、私は漠然とした将来への展望の中でも、海軍への傾斜は否めなかった。徐々にではあったが、見るもの　きくものが海軍を理想として捉え、海軍を身近な組織として親しく感じた

▽わが家で購読していた新聞に昭和16年12月8日からどれ位経ったであろうか、岩田豊雄氏が『海軍』という表題で、連載小説を書き始められた。数え年で13才になっていた私は、父の読んでいる新聞のこの小説を時折、読むようになっていた。〃眞人〃という中学生と、それをめぐる交友関係が繰り返し記述され、〃鹿児島県立2中〃に通っている眞人には男性の友人の外に、女学生も登場して、その女学生の側からする眞人の描写もあった。市内を流れる甲突川の河岸の状景もよく描かれていた。『下荒田町』の自宅商店を営んでいられた)や市街の様子。眞人の学校ひけてからのプライベートな生活の営みが多く書かれていた。今、若し目を閉じても、挿絵のイメージが浮かんでくる程、精読していたように思う。

この眞人が、かの真珠湾特攻の潜航艇の乗員だった横山少佐であり、海軍では軍神として岩佐中佐外8柱が、顕賞され崇められていることを知ったのはかなりあとであった。

▽少年倶楽部(雑誌〃月刊〃講談社)の熱心な読者であった私は、小5から小6は全く時局の申子みたいに、先走ることを寧ろ得意としていた。学級には吾勝ちに戦局に関して情報を一はやく入手する風潮が弥漫していた。

▽今、その一例をあげると、学級の誰もが、海軍には〃陸奥〃や〃長門〃を上まわる新型の大戦艦が建造されており、異口同音に皆知っていたが、或者は五万トンの排水量をもつと言い、他の者は否七万トンはあるよといった風であった。由良は舞鶴海軍工廠で働く親や兄がいたので、情報の伝達は早かったと思われる。

▽ところが、昭和15年度内、発行の少年倶楽部の何月号かの雑誌の中程のコラムでは、海軍省の声明が載っていて、『そんなものの建造は無い。』としていた。それにも拘わらず殆どの11才の学友は、棕櫚の側皮の軍への供出をふまえているので、当局の

公式発表は信じなかった。
更に小5の夏休みに、幼友達の坂根治君の家（註・みきぞう）へ駆逐艦『吹雪』の模型造りに行った。私が丁度、グリコの景品で、木製の模型を持っていたので、これを手本として、手作りの自前の模型を作るのだった。
〃みきぞう〃の中庭で、治君と二人で、暑い中を汗だくになりながら、それぞれに作っていったのだが、11才の私にとっては坂根家の次兄が海軍軍籍におられて、小包を横須賀鎮守府気付で郵送されるのを見たり、長兄が海軍工廠へ通勤しておられて、（寡黙な方のようだったが、）治君にメリハリの行きとどいた対応しておられるのをみると緊張するのだった。
　この時の〃みきぞう〃での海軍事情に触れたことが、海軍への理解と体験を深めたことは否めない。張りつめた空気が感じられた。
▽この外、既刊の平田晋策著の〃日米若し戦わば〃は欲しかったが由良では入手不能で、これの類書を先述の坂根君からやっとの思いで借り出した。内容として、
―マハン戦略。空母を基幹とする輪型陣による西太平洋の渡洋作戦。グアム基地とウエーク基地の戦術的重要性。そのあとで迎え撃つ　吾が国の潜水艦網の優秀性が論じられていた。―
▽坂根治君の外に海軍への接近を加速したのは、由良808に住んでいた大畑武男君（昭和19年には海軍少年兵として逸速く軍籍に入る。海軍工廠勤務を経て）の家へ行くと、次兄の蔵書で、何冊もの各国の主要軍艦のグラビア写真集を見せてもらうことができた。米国や英国、それにドイツ、イタリアなどの空母や戦艦が満載されていた。（2色刷りで、敗戦後の映画雑誌の俳優の容姿の紹介みたいに写っていた）
▽75年を生きた私の頭脳に、反射的に唯今のように伊艦の名前が次々と並ぶ。
『ヴィットリオ・デ・シーカ』『コンテ・デ・カブール。』『カミチヤ・ネラ』は巡洋艦だ。『ヴェンデシンコ・レ・マーヨ』はリズミカルに覚えられた。開戦後、新型駆逐艦が建造され、戦功のあった『エンリコ』（英語のヘンリー）を冠したものだという。
▽田舎の由良村に於いてさえ、その気になれば容易にここ迄踏みこみ得た。これが戦前である。愛国的な小国民として、敗戦迄の思春期を只管生きつづけたという感慨が深い。時局に忠実に生きること以外には、外の術は無かったのである。
（平成16年8月15日了）
（註：文中のみきぞうは由良2665番地で、坂根三喜蔵家と呼んだと思う。）

…オレオレ詐欺にご注意を…

宮津署管内で「オレオレ詐欺」の続編が発生！

「オレオレ詐欺」とは

犯人が、子供や孫等になりすまし、電話で「おれ、おれだよ……」などと言って、交通事故の示談金等の名目で指定した口座に現金を振り込ませるなどの手口でお金を騙し取る詐欺事件です。

○発生例～その１

本年５月16日午後３時10分ころ、被害者宅に

「お母さん、ごめんなさい。」

と、泣きじゃくる女性の声で電話がかかり、母親は我が子からの電話と思っていると男性と代わり

「お宅の娘さんが借りた127万円を払わないので、娘を預かっている。娘を帰して欲しければお金を振り込め。」

と脅された事案。

○発生例～その２

本年５月17日午後５時30分ころ、被害者宅に男から電話がかかり、

「娘が借金した70万円を返さない。車に連れ込んでいる。借金を返さないと売春宿に売り飛ばすぞ。」

と父親に告げ、泣きじゃくる女性が

「70万円借りてしまった。ごめん。」

と言って、70万円を振り込ませようとした事案。

～被害にあわないために～

◎電話がかかってきても慌てないで対応する。

◎不振な電話に対し、相手よりも先に家族の名前等を言わず、相手の名前や連絡先等を確認する。

◎すぐ名乗られた親族等に連絡して事実を確認する。

◎すぐ要求された現金を送金しないで警察へ通報する。

京都府宮津警察署　電話25-0110

編集後記

祭りの太鼓の音が鳴り止み、静かな秋が深まりました。

台風23号で被害にあわれた方々に心からお見舞い申し上げます。

宮津市制50周年記念事業「満喫ウォーク」を楽しみにしておられた方々や準備等に携わってこられた役員の皆様にも、台風を理由に事業を中止せざるを得なかった事情をお酌み取り願いたいと存じます。

今回は由良の子どもたちの感想文が多く、駅伝参加や伝統工芸体験・中学生の海外交流等、地域の子どもたちの活発な活動は明るい話題です。

また、地域の方々の体験記も続き遠い昔を偲ぶことが出来ます。

「公民館だより」も情報伝達の手段ですが最近は光ファイバーにより多くの、そしてスピードのある情報伝達が進んでいます。"情報過疎"にならないようの声が聞かれるこの頃です。

（飯澤）

R100　古紙配合率100%再生紙を使用しています。